

【③拡大再生産策の強化（-1担い手の確保育成）】

○ 戦略の柱：4 生産を支える担い手の確保・育成
（家族経営体を支える労働力の確保と省力化の推進）

【戦略の方向性】

- 生産を強化し、拡大再生産を実現するために必要な、産地が求める担い手の確保・育成を図る
- 家族経営体の底上げや、法人化の推進などにより、強い経営体を育成する

【現状と見えてきた課題】

- ・ 園芸農家の約4割（※）で労働力不足が発生。拡大再生産のボトルネックとなっている。
（主に収穫、出荷調整作業等で不足。地域や品目で不足状況が異なる。（※）主要品目340戸を対象）
- ・ これまでの地縁に頼った確保策では限界。既存制度の活用など求人方法を改善し、地域外・農業外から人を呼び込むとともに、雇用期間や労働条件など雇用条件のミスマッチを解消する必要がある。
- ・ 収量の増加や、高齢化による作業能力の低下などへの対応として、省力化が求められている。

強化のポイント



- ◆ 各地域で労働力を補完する仕組みを構築し、必要な労働力の確保を推進
- ◆ 省力化機器の導入や、省力化栽培技術の実証により、省力化を推進

（取り組みの方向性）

- ◆ 各地域で労働力不足が大きな課題となっている品目を対象に、求人方法の改善や求職者（援農者）のリスト化、労働力を補完する仕組みを作るとともに、雇用条件のミスマッチの解消を図り、必要な労働力の確保を推進する
- ◆ 労働力不足が課題となっている主要品目等を対象に、「ものづくり地産地消・外商センター」等への省力化機器の開発提案や導入、省力化につながる栽培方法の実証を行い、高齢者や雇用者なども作業をしやすい環境づくりを進める

労働力不足対策について

現状及び課題 (H27.12月～H28.4月 調査結果より)

- **全体**
 - ・調査農家の約4割(37%)で労働力不足が発生している
 - ・5年後の経営規模意向 拡大13% (うち、約7割(67%)が労働力に不安) 維持63% (うち、約半数(47%)が労働力に不安)
- **不足する品目、作業内容、不足時期**
 - ・オオバ(67%・収穫)、ミョウガ(60%・出荷調整)、シシトウ(40%・収穫) ニラ(23%・調整)、ナス(20%・収穫)等、ほとんどの品目で不足
 - ・不足時期は、特に気温の高い4月から栽培終了まで
- **不足している主な要因**
 - ・周年で作業がないことが最大の障害との回答
 - ・その他に十分な賃金が支払えない、作業環境が良くない等が挙げられている
- **農家が求める対応**
 - ・求職者へのPRやマッチングの強化
 - ・確保の手段として、JA無料職業紹介所の利用が最も多い
 - ・季節的(一時的)な労働力の確保、ニラでは機械化(そぐり機)
- **その他**
 - ・各地域で状況は異なっているが、多くの当事者は課題意識を持っている(農振C・各JAとの補完調査での印象)

現状維持、規模拡大意向農家
いずれも労働力に不安

主に収穫、出荷調整作業で
不足

雇用期間、労働条件など雇用
条件のミスマッチが発生

既存制度の活用に加え、
省力化が求められている

目指す方向性

- 第3期産振計画の目標達成、拡大再生産に向けて、
- ①労働力不足を解消し農家の意向(規模拡大、収量アップ、現状維持)を叶え、産地の生産力を上げる。
 - ②高齢化による規模縮小のスピードを遅らせる。
 - ③現状維持から、規模拡大への誘導を図る。

取組方針

- **労働力の確保** - ①求人方法の改善
②各地域での労働力補完システム作り
- **省力化の推進** - ③省力化機器の導入
④省力栽培技術の実証・普及

調査結果の要因と対策

労働力不足の要因	取組方針	重点対策	具体的な取組
● 既存制度の活用が不十分 ・身近な友人等に頼っており、 高齢化等により人が少ない	労働力の確保 ①求人方法の改善	1 ハローワーク、シルバー人材センター等の活用促進	●農家(求人者)に利用方法を周知 ●求人者・求職者に対する研修の実施 ・農家(求人者)に対する労務管理研修(雇用保険、労災など) ・求職者に対する技術研修(栽培管理・機械操作など) ●斡旋不調の要因を調査し、農家(求人者)への改善指導を実施
● 地域内に人がおらず、求職者が少ない		2 JA無料職業紹介事業を核とした地域毎のマッチングの仕組みづくり	●各地域で無料職業紹介所の立ち上げを誘導 ●無料職業紹介所の体制整備・活動充実を支援(運営費、広告費、人件費など)
● 雇用条件のミスマッチ 被雇用者の作業環境・条件整備が不十分(ハウス内等の寒暑、栽培方法等) 求職者の栽培技術が十分でない 十分な賃金が支払えない 手当、保険等が不十分 農業者の労務管理意識が不十分 求職者の周年雇用へのニーズに対応できていない	②各地域での労働力補完システムづくり	3 求職者(援農者)の確保(労働力となる人材の確保)	●各地域で求職者(援農者)のリスト化(データベースの作成・更新) ●新たな求職者(援農者)の掘り起こし ・種苗会社、森林組合、県内の大学などに働きかけ
● 作業能力の低下 高齢化により作業能力が低下し、手が回らない		4 雇用条件のミスマッチの解消 ・作業環境や労働条件の改善 ・周年雇用の創出	●作業改善、栽培技術、経営改善、労務管理などの研修を支援 ●周年作業を生み出す体系を産地へ提案(複合経営) 促成キュウリ+新ショウガ、促成ナス+露地オクラ等(産地内の品目間連携) 大葉とシシトウ、ミョウガとシシトウ等(他産業との連携) 企業の閑散期と農作業との組み合わせ等
	省力化の推進 ③省力化機器の導入 ④省力栽培技術の実証・普及	5 機械化の提案・省力化の実証及び導入	●省力化機器の開発・普及、包装形態の見直し ・シシトウパック詰め機の開発支援、ニラそぐり機の導入等 ●省力栽培技術の実証・普及 ・ナス(農業大学校)、シシトウ(農業担い手育成センター)で作業の単純化による省力効果を実証、現地検討会を実施

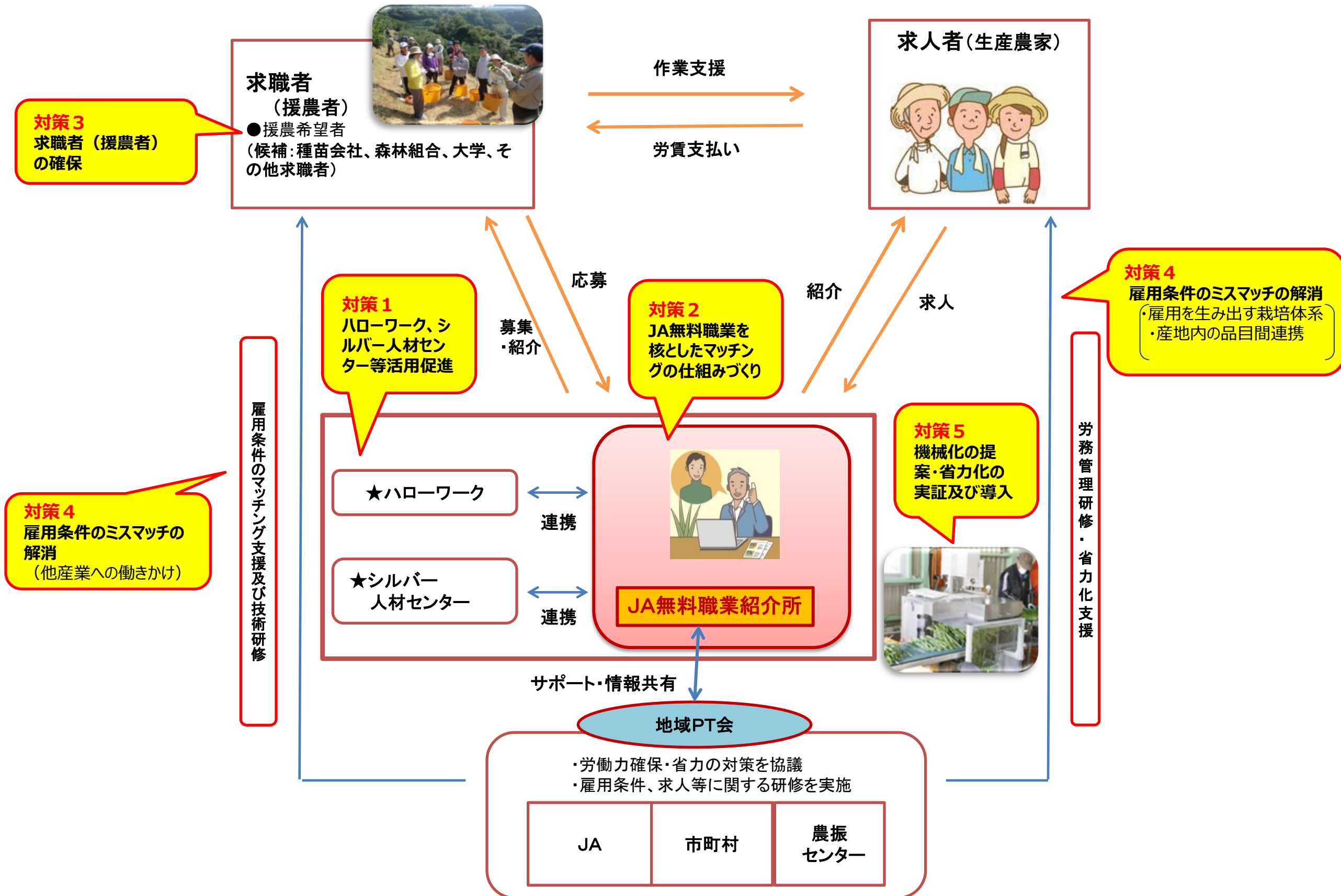
(国) 援農隊マッチング支援事業の活用

各地域に応じた労働力確保の仕組みづくり
重点対策の組み合わせによる



外国人技能実習生の受け入れ

労働力不足対策（全体イメージ図）



ショウガの収穫調整作業の流れと機械化の検討



収穫直前のほ場の様子



冷蔵庫に貯蔵



トラックへの積み込み



改善の目的(どうしようとしているのか)

- 収量を維持しつつ、熟練技術に頼ることなく、誰もが作業のできる栽培技術の単純化、省力化を実証する。

現状(改善or導入が必要な作業の実態)

- 1 【主枝の誘引作業や側枝の切戻し(芽かき)作業】 ⇒ 労力の多くを占め、規模拡大や雇用型の経営発展を妨げている。
 - ① 全労働時間1,769時間/10aのうち、32%(570時間)を占める。
 - ② 側枝の切戻し(芽かき)作業は、熟練を要し、雇用人に任せる農家は極めて少ない。
- 2 【畦立て】 ⇒ 根の生育促進などを目的に、酷暑の中、慣習的に行なわれている(4時間/10a)。⇒ 農業技術センターではナス等で畦立てなしでも減収にならないことを実証済み。
- 3 【灌水】 ⇒ 電磁弁による自動化が進んでおらず、畦ごとに農家がバルブの切り替えるため、時間をロスしている(約5%、85時間/10a)。

改善前(問題点)

こんな問題があった

- 1 側枝の切戻し(芽かき)は、残す良い芽を選ぶために熟練が必要で、雇用者には困難。
- 2 主枝に糸をくくり、巻く現在の糸誘引は、慣れない雇用者では作業効率が悪い。
- 3 ハウス内の畦立ては酷暑の時期であり、体に堪える。また、灌水過多により通路が水浸しになりやすく作業がしにくい。
- 4 灌水中は、バルブの切り替えが必要で、付きっきりとなり他の作業ができない。

改善後(対策)

こんな対策をしてみた

- 1 常に側枝の芽は、茎部に近い芽を残し(1芽摘芯)、作業を単純化する。
- 2 主枝の茎元をくくる作業をトマトのクリップ止めを使い効率アップ。
- 3 平畦(畦立て無し)にする。
- 4 日射比例装置(電磁弁切り替え)による灌水の自動化。

① 切り戻し方法

④ 灌水 (手動)

① 切り戻し方法

④ 灌水 (電磁弁で自動化)

◆ 全労働時間1,769時間(10a)

うち ① 切り戻し ② 誘引 ⇒ 570時間
 ③ 畦立て ⇒ 4時間
 ④ 灌水 ⇒ 85時間 計664時間

◆ 熟練作業の切り戻しは雇用者に任せられない。

15%削減
(259時間)

◆ 全労働時間1,510時間(10a)

① 切り戻し ② 誘引 ⇒ 400時間
 ③ 畦立て ⇒ 0時間
 ④ 灌水 ⇒ 5時間 合計405時間

◆ 作業の単純化で切り戻しも雇用者に任せられる。